

SHINWA WALK 6

源頼朝の生誕伝説

伝説
そぞろ歩き
空蟬の世の
歴史は巡る

諸行無常
おどれる者も
久しからず



頼朝は熱田大宮司の孫 誓願寺に残る生誕伝説

熱田神宮の西側に誓願寺という寺院が建っています。この寺に伝わっているのが源頼朝の生誕伝説で、境内には「源頼朝産湯の井」が今も残っています。この周辺は平安時代末期には熱田大宮司の屋敷があった場所とされており、1192年に鎌倉幕府を開いた頼朝は、1147年、この地で生まれたと伝えられているのです。

熱田神宮では創始以来、大宮司は尾張氏が世襲していましたが、平安末期、大宮司・尾張貞時の子、その娘が尾張国の目代・藤原季兼に嫁いで季範を産みます。

この季範が後を継いで大宮司となった以後、藤原氏が大宮司を世襲。藤原氏は後に千秋家と称することとなります。この季範の娘・田山良が源義朝に嫁いで生まれたのが頼朝です。つまり、頼朝は熱田大宮司・季範の外孫にあたります。



熱田大宮司の権力は地方官である国司をも凌ぐといわれていて、大宮司の娘を嫁にもらうことで、源氏がその勢力と手を結んだという政治的画策があったのかもしれませんが。当時、子供は生母の実家で育てるのが一般的な生活様式であったので、頼朝は幼少時代は大宮司家で過ごしたかと思われます。

やがて、1159年の平治の乱で義朝は平清盛に敗れ、源一族は近江路を敗走します。翌1160年、義朝は尾張の野間で長田忠致・景致親子に討たれ一生を終えました。

この時、頼朝はまだ13歳で、近江路の途中、義朝とはぐれ、東近江の草野庄司に匿われることになります。すぐに平家に捕われることとなりますが、その前に義朝から託された源氏の家宝「麗切」の太刀を草野庄司に託して熱田大宮司の元に届けさせたのです。

それが功を奏し、後日、源氏挙兵の際、再びその太刀を振りかざし、平家討伐を果たしたといわれています。



▲誓願寺の境内には「源頼朝産湯の井」が今も残っている。

平氏を滅ぼし平氏に破る 盛者必衰の理は人生訓

平家に捕われた頼朝が、なぜ殺されなかったか。そのキーパーソンとなるのが、池禪尼です。平頼盛の母である彼女は、平清盛の継母であり、熱田大宮司・季範の伯母でもあったのです。

その池禪尼が、頼朝を早死にした自分の子・家盛に似ているとして、清盛に頼朝の助命を懇願した結果、頼朝は伊豆に島流しされることとなり、一命をとりとめたのです。皮肉にも、これが平家滅亡の一因となってしまふのが、運命の綾といえます。

ギリシャ神話では、全能の神・ゼウスとアルゴスの王女・アルクメネの間に生まれたのが、ヘラクレス。頼朝にも劣らぬ英雄です。しかし、ゼウスの浮気を知ったゼウスの正妻・ヘラの怒りに触れて、ヘラの策略によりエリュステス王の命命で、ヘラクレスは12の冒険に出ることになります。これが「ヘラクレスの冒険」で、なかでも2番目の冒険「九頭蛇・ヒュドラー退治」が有名。矢じりをヒュドラー自身の毒に浸して毒矢をつくって、見事退治しました。

持ち前の腕力と頭脳を駆使して、12の試練をすべて乗り越えたヘラクレスは自由の身となり、やがて王女・ディアネイラと結婚しますが、ある日二人で川を渡る時、ネッソスと



いうケンタウロスにディアネイラを犯されそうになり、ヒュドラーの毒矢で退治しました。その際、ディアネイラは、ネッソスから「夫の愛をつなぎとめておきたいなら、私の血をとっておけ」と耳打ちされ、その言葉に従います。

やがてヘラクレスはイオレという美少女に入れ上げることであり、ディアネイラはネッソスの血を染み込ませた服を夫に届けます。服を着けたとたん、ヘラクレスは苦しみだし、海に身を投げて死にました。ネッソスの血にはヒュドラーの毒が混っていたのです。

頼朝は鎌倉幕府を開いて7年後の1199年、落馬した怪我が原因で53歳の若さでこの世を去ります。かろうじて頼朝の子である頼家、実朝が順に将軍を引き継ぐものの、頼朝の妻・政子の父である北条時政一族の陰謀により、源氏將軍はたつたの三代で途絶えてしまい、その後は北条氏が執権として権力を握ります。北条氏は系図でいえば、平氏の流れを汲んでいて、平氏を滅ぼしたはずの源氏が、結局は平氏の末裔によって滅ぼされることになったのです。

平家物語の一説に「おどれる者も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」とあります。空蟬のようなこの世は、巡るもの。盛者必衰の理は、平氏だけでなく、源氏にもヘラクレスにも当てはまります。



次回は、社畜司社に伝わる「平頼門伝説」をお送りします。お楽しみに。
■ 写真 / Kiyoshi K ■ イラスト / Rei ■ 取材・文 / Icarus